

PERIOD

=====

Chapter 3

<<2Page>>

「ココは...オモリもいる...?」

<<3Page>>

「サニー、無駄だからやめた方がいい」

「!?」

(話せる...!?)

「その言い方...今日も僕は死ねなかったってこと!？」

「うん、僕がやめさせた」

「今回も前回もその前もその前も、何回も何回も」

「止めるためにあなたの体を使っちゃった。いいよね？」

「体の話はこの際どうでもいいけど...」

<<4-5Page>>

「なんでそこまでして死なせてくれないの？ 生きる意味なんてもう無いのに...」

「サニー、そこに座って」

「...ツ」

「.....」

「座って」

「!?」

「ヒツ、あ...まっ...！」

<<6Page>>

「オモリ...」

<<7Page>>

「あなたが本気で死にたいと願ったなら、僕もちろん肯定する」

「でもそうしなかった」

「くっ...」

(外せない！)

「なんで死なせないのかって？ あなたも気付いてるでしょう？ 本当の自分の気持ちに」

「首吊りしようとした時がいい例だ。縄の結びが甘かった、ということは...」

「あなたはまだ死ぬのを怖がってるし、生きるのをどこかで諦めてない。だから僕は死なせなかった」

「そんな...」

「ねえ、“オモリ”が生まれた時のこと覚えてる？」

<<8Page>>

「あなたがマリを殺めてしまった現実、バジルと一緒に隠してしまった真実。それらから夢に逃げるための鎧...繭として生まれたのが僕」

「どうしてか自我まで生まれちゃったけど」

「僕はサニーを守るために在るから、死にたくないなら死なせるわけにはいかない」

「.....僕が死ねない理由をムリヤリ納得させようとしてる？」

「そう聞こえるならそうなんだと思う」

「僕の言葉はただの事実。そしてサニーが望んだ答え」

<<9Page>>

「僕が望んだ...」

「僕はサニーだから、あなたが求める言葉を伝えなきゃいけない」

「忘れないで」

「死ぬ前にまだやってないことがあなたにはあったはずだ」

「それは、」

<<10Page>>

罪責に向き合うことができなくて
抑えて隠して必死に見ないフリをしてきたけれど
忘れられるはずもなくずっと燻っていて
胸の奥は真っ黒で重かった

懺悔すればきっと、押し潰されそうな苦しさから少しは解放されると思う
それはわかってるけど、
「言えない...」

「言えてたらこんなことになってない...！」

<<11Page>>

「勇気の問題じゃない」
「.....」
「何もかも僕の存在が悪い。僕がいるだけで最悪な運命に決定される」

「いっそ誰かが殺してくれていい。誰も殺してくれないなら自分で死んだっていいだろう？」

「サニーが死にたいなら死んだ方がいいと思う。僕は否定しない」
「無理に強くなる必要なんて無い」

「強く...僕がもう少し強かったら...誰も死なずに済んだのに...」

「...!!」

「それなら、」

<<12Page>>

「僕じゃなくてオモリだったら...？」

「.....」
僕が願った“サニー”なら、あるいは――

「サニーじゃないオモリなら、マリを階段から落として殺したのもバジルが死んだ原因も全部僕だってみんなに話せるんじゃない...」

「...うつ、うえ、」

僕はまた、

<<13Page>>

性懲りも無く自分の罪から逃げようとしてる
「うう、うああ…」

もっと強くなりたかった
「サニー、顔上げて」

オモリが羨ましい
「ぼ、ぼく、いらな、も、いい、..」

「ちゃんと言葉にして」
「...ッ」
お前ならきつと言えずじまいの後悔なんてしない

そうなるように僕自身が願ったから
「た、..て、..」

<<14Page>>

たすけてたすけてたすけてたすけて助けてたすけてたすけてたすけてたすけてタスケテ助けてたすけてたすけて助けてタスケテ助
けてたすけてたすけて助けてたすけてたすけて助けてタスケテ助けてたすけてたすけて

「たすけて、オモリ、..」

僕《サニー》はもう要らない

<<15Page>>

「.....」

「わかった。あなたが望むなら」

「！」

<<16Page>>

「僕でやったからわかるでしょう。今度こそ自分で終わらせて」

「おやすみ。サニー」

「おやすみ、オモリ...いや、サニー」

<<17Page>>

みんな、バジル、マリ

最期まで卑怯な僕でごめんなさい

でも、これからはきっと全部うまくいくから...

<<18Page>>

□□□□...――